

58

『櫟窓医贖』から『医贖』へ

——刊本『医贖』の成立と多紀元簡の考証学を中心に——

景 徳

鹿児島大学人文社会科学研究所地域政策科学専攻

【問題提起】『医贖』は多紀元簡(1755-1810)が天明から文化年間にかけて、数度にわたって加筆された筆記である。文化六(1809)年に、その刊本が三巻に附録を加えた形で上梓された。本文は上巻に医経、中巻に方書、下巻は本草に関する論考が漢文で書かれている。下巻の末には附録として「募原考」・「銅人圖経考 附銅像考」・「屠蘇考」・「梅雨考」・「冬虫夏草考」・「吸毒石考」の六つの詳しい考証が行われた。その刊本の自序に「余辛酉冬被黜于外班、公事頗閑、然日省病、家不遑寧處、唯每燈火可親之候、取壯時所筆記為之編刻、題顔曰医贖、以仰正于来哲、櫟蔭拙者、」と著作した意図を述べている。現在、日中両国には刊本『医贖』に基づいて行われた研究や論述が多くて、その諸写本へ関心は不十分である。特に、その諸写本の異同や成立過程につき詳細な検討はなされていない。

【方法】①慶応義塾大学富士川文庫『櫟窓医贖』(以下「富士川本」と略す)②東京大学鵜軒文庫『櫟窓先生医贖』(以下「鵜軒本」と略す)③東北大学狩野文庫『櫟窓先生医贖』(以下「狩野本」と略す)④前田育徳会尊経閣文庫『医贖』(以下「尊経閣本」と略す)の諸写本から調査を行い、序文・跋文・部類・項目数・按語などの要素によって、『櫟窓医贖』から『医贖』までの変化過程に関連することを統計する上で、刊本により異なる諸写本の本来の様子を検討した。

【考察】刊本『医贖』は多紀元簡の日頃の筆記や随筆の抄録である。諸写本の調査によって、①「富士川本」②「鵜軒本」③「狩野本」は四巻本であり、④「尊経閣本」は三巻本である。元簡の『医贖』は四巻本から起稿され、「富士川本」に基づいて添削され、後に大幅に修正を加えられた。「富士川本」「鵜軒本」「狩野本」の中に、各写本は総項目数が120項超え、各巻には30項ぐらいである。尊経閣本は最も刊本に近い、その底本となり、項目数は上巻に45項、中巻に84項、下巻に36項、附録に6項、合計171項となる。四巻本と比べると、項目数が大幅に添削され、配列も分類も整えられてきた。四巻本から三巻本まで進化する様子から見ると、元簡の青壮年期から晩年までの知識の集積の様子が見られている。

刊本『医贖』は上巻に医経、中巻に方書、下巻は本草に関する論考が漢文で書かれている。刊本の序文には元簡が左遷されて以来の活動に言及し、跋文には六弟元晁により元簡の著述概略と出版趣旨について紹介された。諸写本には元簡が天明期から文化年間にかけて、数十年間の学問的な関心を強調した。元簡が幕府医官と江戸詰の医師たちの情報中枢として、彼の著述活動に伴い、その身の回りに活躍する動的な知識人ネットワークが点描できる。例えば、「中風」「促脈」の項目には薩摩藩第八代藩主島津重豪の侍医曾槃(1758-1834)の按語があった。さらに、「温湯」「廣東人參」「底野迦」「牧靡」「冬虫夏草考」「吸毒石考」などの考証は、曾槃の著述『本草綱目纂疏』『葉圃擷余』に大きい影響を与えた。写本の異同によって、元簡と曾槃との動きについてどう繙くことが一助となる。

【結論】『医贖』諸写本の成立過程と多紀元簡と曾槃の編纂活動の繋がりを中心として、諸写本とその内容の異同を比較することによって、その二人の学問の特徴について一部明らかにした。これらを比較・検討することで、『医贖』と諸写本の本来の姿に迫る。